

流行色傾向分析に関する研究

—'87AW~2000AW パリコレクションの色彩傾向—

渡邊 芳道

(平成12年10月5日受理)

An Analysis of the Trend in Fashion Color

Yoshimichi WATANABE

(Received on October 5, 2000)

キーワード：色彩傾向，流行予測色，時系列法，相関関係，色相 & 色調

Key words: the trend in fashion color, forecast color, the method of the succession in time correlation, hue & tone

1. はじめに

流行は発生・成長・成熟・衰退のサイクルを持つ流動性に特徴がある。変化を求める人々の欲求に新しい刺激が反応し発生する。さらにこの刺激が多くの人々の同調を誘発しながら成長し、やがて衰退する。流行の変化が最も現れやすいのが流行色である。

ファッション産業では商品化する上で、流行色の変化を先取りした需要喚起策が実施されている。それだけに、人々の色彩に対する好みや時代感覚の変化を見通す流行色の予測が重要な業務になっている。予測の仕事はどの時点でも行うことができるが、実需期よりも2-4ヶ月以前から始まり、種々な色彩情報の分析活動がそれから展開される。商品化計画期と実需期の不可避的な時間差と市場の動きがここに存在するため、特に予測における流行色の方向性に関心が集中する。また、予測分析は常に色彩による状況とイメージ構築から始められ、形や材質などデザイン要素へと受け継がれる。つまり、色彩がデザイン以前に情報としての重要な機能を担っている。

色彩情報の予測分析には、客観的に確立された色の尺度(表色系)と表示方法がある。そのためデータの加工、蓄積、伝達を正確に行うことが出来る。形や材質などのデザイン要素は属性が多く、定量的表現が簡単ではないが、色彩を表色系で示すことができ、定性的事実をより精確に定量的情報に置き換えることが出来る。色彩傾向

分析は、商品化計画の初期段階で予測色の策定とその結果を年2回、シーズン(春夏、秋冬)毎に分けて行われている。

今回の「流行色傾向分析に関する研究」は、1987年秋冬から2000年秋冬までの14年間の色彩情報を日本色研配色体系(PCCS)に基づき、データ化し、蓄積をした結果である。

予測のための分析は、色相と色調(トーン)の2つの側面から時系列的にアプローチし、そこに相関する色彩傾向の規則性を研究した。

2. 研究方法

1) 色彩情報

1987年秋冬パリ・ミラノコレクション号から2000年秋冬パリ・ミラノコレクション号までの季刊誌「FASHION NEWS (ファッションニュース)」(発行 株式会社流行通信社)14冊を基にした。この誌面のパリコレクションを取り上げ、デザイナー別写真を対象にカラーを抽出した。

2) 抽出色数と対象デザイナー数

抽出色	14年間総数	6246色
デザイナー数	14年間 延	616人
	デザイナー数	抽出色数
87/88年秋冬	32	258
88/89	31	412
89/90	29	285
90/91	49	524

9 1 / 9 2	4 1	5 1 6
9 2 / 9 3	4 3	5 1 8
9 3 / 9 4	3 6	3 6 4
9 4 / 9 5	5 2	5 0 6
9 5 / 9 6	5 9	4 8 7
9 6 / 9 7	5 5	4 7 2
9 7 / 9 8	4 6	4 0 3
9 8 / 9 9	5 0	4 5 5
9 9 / 0 0	4 6	5 5 4
0 0 / 0 1	4 7	4 9 2
合計	6 1 6	6 2 4 6

3) 表色系と色の分類

表色系は日本色研配色体系 (PCCS) を採用し、各年秋冬シーズン出現抽出色について、PCCS による 12 色相, 14 色調, 無彩色 9 段階による 177 色区分体系の標準カラーコードに基づき, 分類し, 出現頻度分布表を作成し, データ化した。

注 PCCS の色相環 (図表-7), トーン区分 (図表-8), トーン の分類 (表-5) 文末参照

4) 分析方法

データから 14 年間の平均を算出し, 年度毎の出現頻度を百分率に置き換え, 各年秋冬シーズンを中心に色相, 色調, 明度, 無彩色に整理した。このデータを基に時系列的に相関する色彩傾向の規則性を解析した。

3. 調査分析

分析前に, 色の基本について述べると, 色には有彩色と無彩色の 2 種類がある。有彩色には色の 3 属性と呼ばれる色相, 明度, 彩度をもつが, 無彩色は明度のみを持つ。色の 3 属性の中で明度と彩度が組み合わされて色調 (トーン) を形成する。流行色傾向分析には 1) 色相, 2) 色調から進める。

1) 色相

1987 年秋冬から 2000 年秋冬までの 14 年間の各シーズンの色相別出現比率を (表-1) にまとめた。

各色相の出現比率について平均 10% 以上の色相は, 色相 2 / レッド系, 色相 4 / レッド・オレンジ系, 色相 6 / イエロー・オレンジ系, 色相 18 / ブルー系の 4 色相である。12 色相中暖色系 3 に対して寒色系は 1 である。出現比率平均 2% 以下の色相は, 色相 10 / イエローグリーン系, 色相 12 / グリーン系, 色相 14 / ブルーグ

リーン系の 3 色相でグリーン系の出現比率は極めて低い。そこで色相の分析は (1) 暖色系と寒色系, (2) 補色の関係について解析することにした。

(1) 暖色系と寒色系による分析

色に温度感覚があることはよく知られている。暖色, 寒色というのは色相の感情である。この言葉は色彩用語とともに日常用語としても使われている。一般に長波長のレッド系 (色相 2), オレンジ系 (色相 4, 6) など暖かい感じを与える色相を暖色系という。これに対して寒色系とは短波長のブルー系 (色相 18) など寒い感じや涼しい感じを与える色相の系統をいう。この両者の中間に当たる暖寒を感じないグリーン系 (色相 10, 12) やパープル系 (色相 22) を中性色という。

そこで, 暖色系 (色相 2, 4, 6, 8) と寒色系 (色相 14, 16, 18, 20) に分けて 14 年間の平均出現比率をみると, 暖色系が 50% に対して寒色系は約その半分の 24% である。中性色 10%, 無彩色 15% を加え, 14 年間の時系列変化を図表化し, 比較してみた結果から考察すると, 年々暖色系の比率が下がり, 寒色系の比率が増加していることが分かる。また, 無彩色の比率が暖色系の減少に対し 95 年まで増加している。さらに最近の無彩色 (黒, グレー, 白) の流行が市場に定着し, 特に黒の場合, クールな感覚の色として根強い人気があることやグレーの場合, 寒色系の紺との相性が良いことなど, 無彩色も寒色的に扱われるようになったことから, 暖色系に対し, 無彩色を寒色系に加算して図表化したのが (図表-1) である。95 年の無彩色の台頭を契機に暖色系の減少と寒色系の増加により両者の比率は年々接近傾向にあるが, この両者を比較してみると, 相互の増減が相関する関係にあることが確認できる。

(2) 補色 (反対色相) の関係

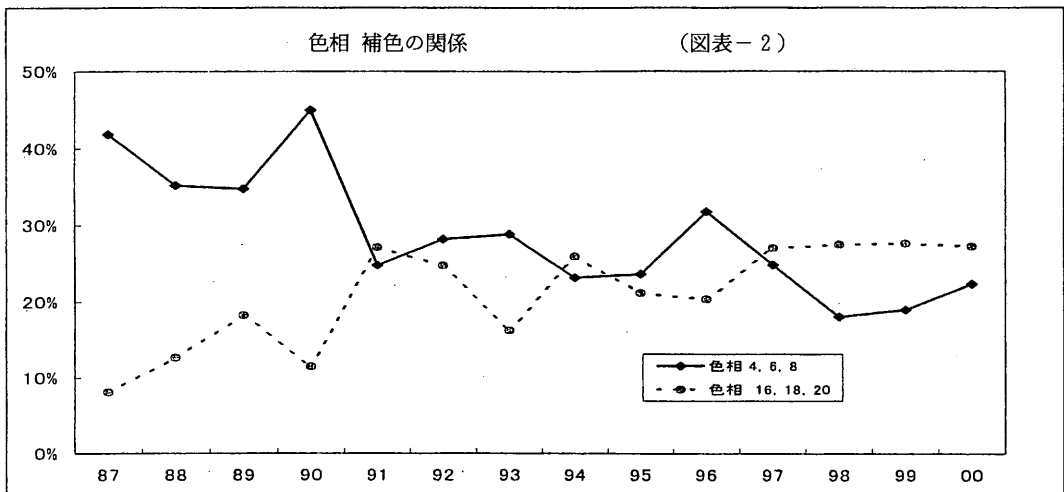
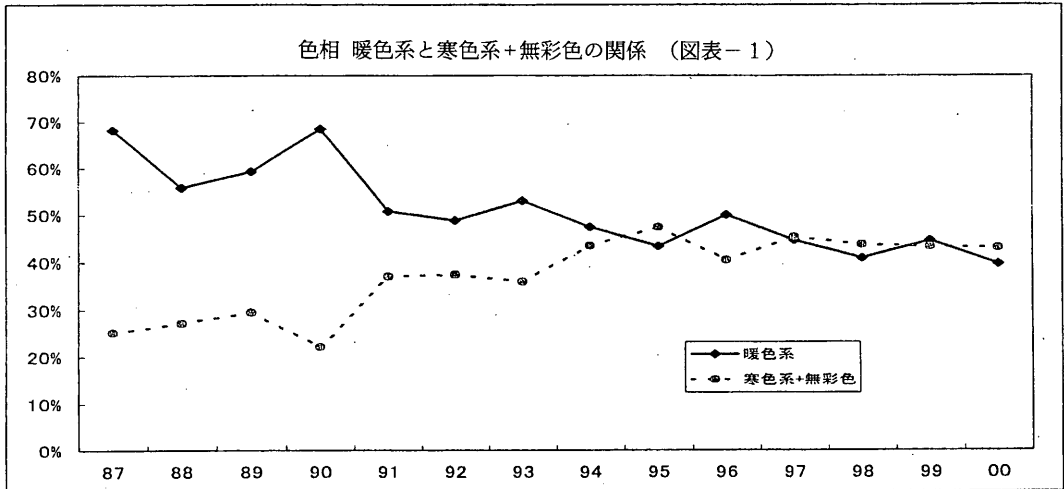
PCCS の色相環の対向位置にある色相は心理補色の関係にある。心理補色とはある色をしばらく見つめた後, 白い紙などに目を転じた場合残像として現れる色をいう。PCCS における 12 色相の中で補色関係にある色相は色相 2 と 14, 4 と 16, 6 と 18, 8 と 20, 10 と 22, 12 と 24 の 6 つの組み合わせからなる。この内, 14 年間の平均出現率を見た場合色相 10, 12, 14 の出現比率が少なく比較対象外とした。残りの組み合わせは色相 4 (オレンジ系) と 16 (ブルー系), 6 (オレンジ系) と 18 (ブルー系), 8 (イエロー系) と 20 (バイオレット系), の 3 つの組み合わせになる。この 3 つの補色関係について時系

流行色傾向分析に関する研究

1987AW～2000AW 色相出現比率 (表-1)

色相	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	0	Total
24	9%	8%	10%	6%	12%	8%	12%	10%	7%	7%	8%	12%	12%	8%	9%
2	17%	13%	15%	17%	14%	13%	12%	14%	13%	12%	12%	11%	13%	9%	13%
4	26%	15%	17%	21%	11%	13%	14%	12%	6%	14%	10%	7%	8%	11%	13%
6	13%	15%	12%	15%	10%	11%	11%	7%	12%	11%	8%	8%	8%	9%	11%
8	3%	6%	6%	8%	3%	4%	4%	4%	5%	7%	6%	3%	3%	3%	5%
10	0%	3%	1%	3%	1%	1%	2%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%
12	1%	3%	1%	2%	3%	2%	1%	1%	1%	0%	0%	2%	1%	1%	1%
14	2%	2%	1%	1%	1%	2%	1%	1%	2%	1%	3%	1%	2%	1%	2%
16	2%	2%	4%	1%	7%	4%	1%	7%	4%	3%	4%	2%	5%	4%	4%
18	6%	4%	7%	6%	13%	12%	6%	13%	9%	11%	16%	12%	12%	11%	10%
20	0%	6%	8%	5%	7%	9%	9%	7%	8%	6%	6%	13%	12%	13%	8%
22	5%	11%	9%	3%	6%	9%	7%	7%	7%	8%	8%	13%	9%	13%	8%
Neutral	15%	13%	11%	10%	9%	11%	18%	16%	24%	19%	15%	16%	14%	14%	15%
G&S	0%	0%	0%	1%	2%	2%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	1%	1%
Total	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

AW=AUTUMN/WINTER G&S=GOLD&SILVER



列に比較してみた。個別に行った場合相関性があるように推移しているので、さらに色相4, 6, 8と色相16, 18, 20にまとめて比較し、(図表-2)を作成した。この図表をみると、相互に相関することがより明確になった。つまり、90年代になってオレンジ系、イエロー系とブルー系、バイオレット系が3~4年ごとに交互に増減し、変化を繰り返していることが分かった。予測の方向性を確認するためには、オレンジ系、イエロー系の補色になるブルー系、バイオレット系の増減をチェックすることが重要になる。

2) 色調

1987年秋冬から2000年秋冬までの14年間の各シーズンの色調に関する出現比率は(表-2)である。

色調の分析はPCCS記号に基づき、有彩色168色を明度と彩度に分解し、(1)彩度、(2)明度による分析を行った。

(1) 彩度による分析

彩度とは色の3属性の1つで色味の強弱(鮮やかさ)の尺度である。有彩色に見られる性質である。最も彩度の高い色を純色という。一般に彩度の表現は「強い、弱い」、「彩度が高い、低い」といい、大きく高彩度、中彩度、低彩度と位置づける。

PCCSの場合、彩度の単位はsで表す。また色調

(トーン)によって彩度が統一されている。

高彩度に属するビビッド(v)は9s, ブライト(b), ストロング(s), ディープ(dp)は8sである。

中彩度に属するライト(lt+)は6s, (lt), ソフト(sf), ダル(d), ダーク(dk)は5sである。

低彩度に属するベール(p+)は3s, (p), ライトグレイッシュ(ltg), グレイッシュ(g), ダークグレイッシュ(dkg)は2sである。

分析は高彩度(9~8s), 中彩度(6~5s), 低彩度(3~2s)に分類し、彩度0の無彩色を加え、4区分について14年間の出現比率を時系列に図表化した。その結果、出現比率においては92年から低彩度の割合が高いが、高彩度と低彩度(図表-3)が相互に3~4年毎に増減を繰り返し、相関することが分かった。次に中彩度と無彩色の場合(図表-4)は、中彩度の出現比率が高いが、95年の無彩色の台頭を軸に94年から98年にかけて相互に増減を繰り返し、相関しているが分かった。つまり、高彩度と低彩度の変化の度合いによって、また中彩度と無彩色の増減によって予測のための方向性が確認できる。

(2) 明度による分析

①低明度、中明度、高明度の比較

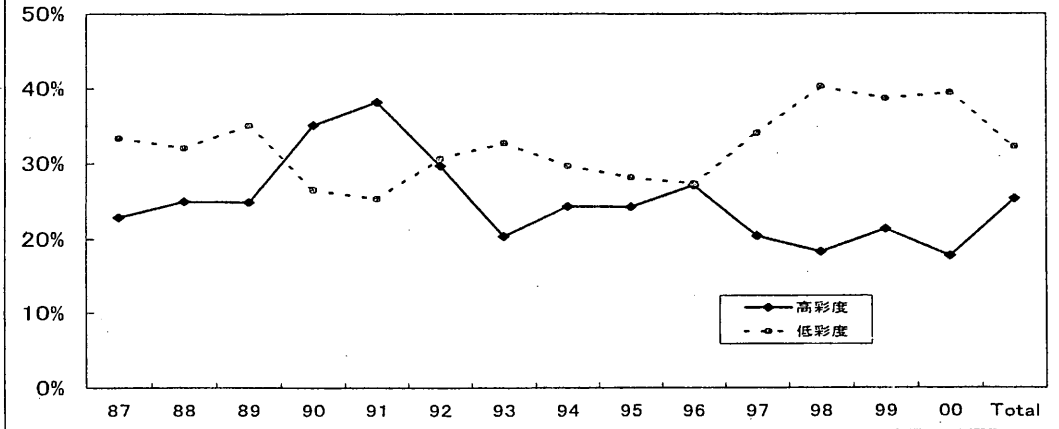
明度とは色の明るさの度合いで有彩色にも無彩色にも見られる色の3属性の1つである。PCCSの場合、白

1987AW~2000AW 色相出現比率 (表-2)

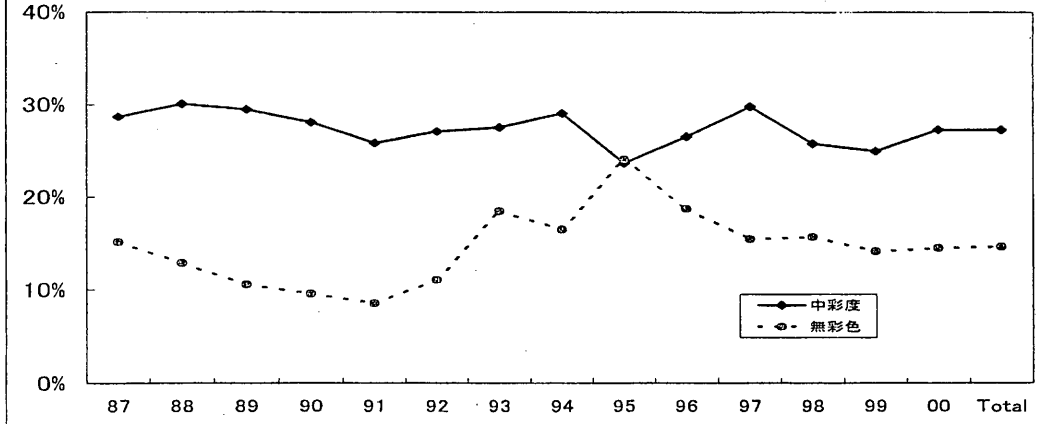
色調	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	0	Total
p	3%	5%	4%	3%	2%	3%	4%	1%	6%	6%	3%	4%	4%	4%	4%
p+	1%	2%	1%	4%	3%	2%	2%	1%	2%	2%	3%	4%	2%	4%	2%
lt	0%	2%	1%	2%	2%	3%	0%	2%	2%	3%	1%	2%	2%	2%	2%
lt+	1%	6%	2%	2%	2%	1%	2%	2%	2%	3%	2%	1%	1%	2%	2%
b	3%	7%	4%	6%	5%	5%	1%	3%	5%	4%	3%	2%	2%	4%	4%
v	9%	6%	6%	14%	15%	10%	8%	6%	7%	10%	4%	4%	6%	6%	8%
s	3%	6%	3%	7%	8%	7%	4%	6%	4%	5%	6%	5%	5%	4%	5%
dp	7%	6%	11%	8%	11%	9%	7%	9%	8%	8%	7%	7%	8%	5%	8%
dk	11%	9%	16%	10%	10%	12%	11%	14%	8%	9%	8%	12%	8%	10%	10%
dkg	17%	11%	15%	10%	10%	13%	11%	12%	7%	8%	9%	16%	13%	15%	12%
ltg	9%	9%	9%	5%	6%	7%	8%	8%	7%	7%	12%	10%	12%	9%	8%
g	4%	5%	6%	4%	4%	6%	7%	8%	6%	5%	5%	7%	7%	8%	6%
sf	7%	5%	3%	5%	6%	3%	6%	7%	4%	5%	8%	5%	4%	7%	5%
d	9%	8%	7%	9%	6%	8%	9%	5%	6%	7%	11%	6%	8%	6%	7%
Neutral	15%	13%	11%	10%	9%	11%	18%	16%	24%	19%	15%	16%	14%	14%	15%
G&S	0%	0%	0%	1%	2%	2%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	1%	1%
Total	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

AW=AUTUMN/WINTER G&S=GOLD&SILVER

彩度 高彩度と低彩度の関係 (図表-3)



彩度 中彩度と無彩色の関係 (図表-4)

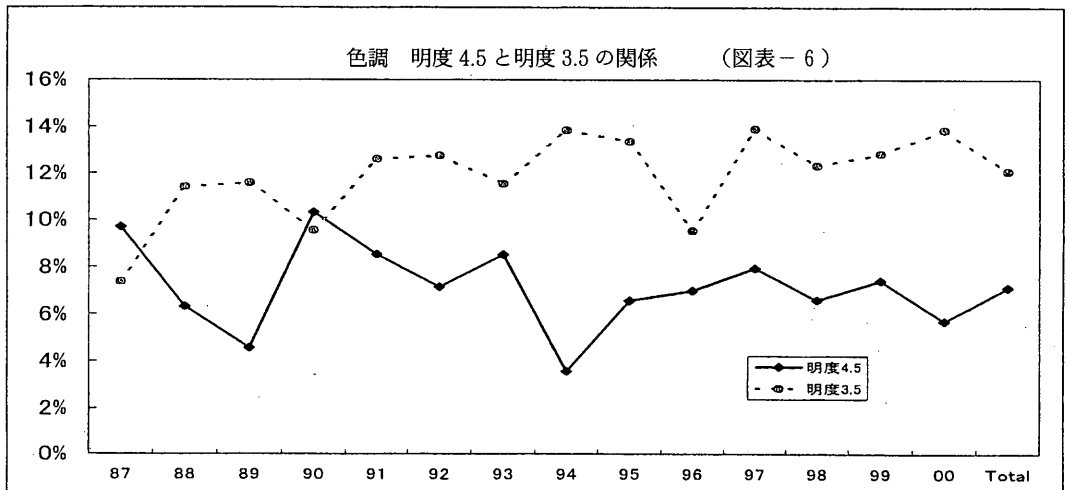
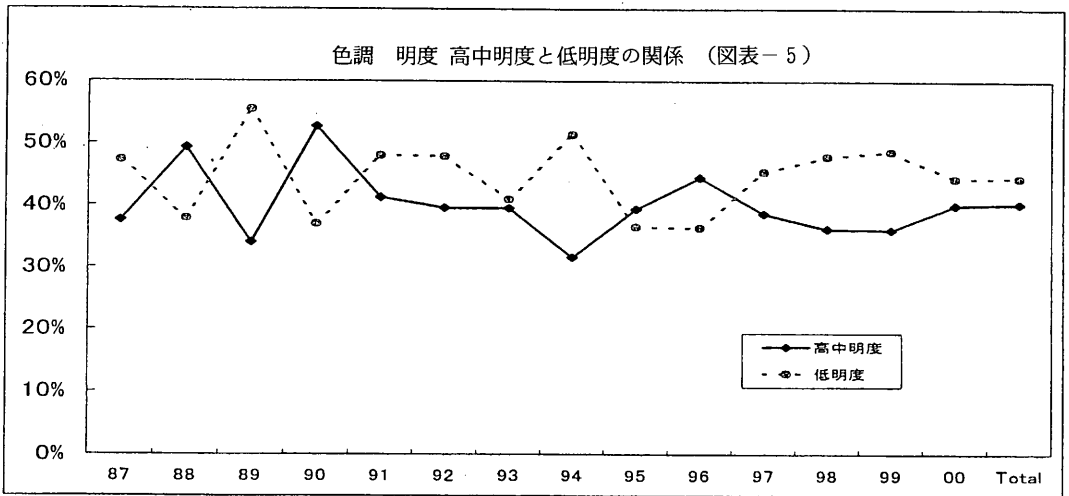


色調別明度数 (表-3)

明度	9.0	8.5	8.0	7.5	7.0	6.5	6.0	5.5	5.0	4.5	4.0	3.5	3.0	2.5	2.0	1.5	Total
p	3	6	3														12
p+	1	2	6	3													12
lt	1	2	2	2	2	3											12
lt+		1	2	2	2	2	3										12
b		1		2		2	2	2	3								12
v			1		2			2		2	2	3					12
s				1		2			2	2	2	3					12
dp							1		2		2	2	2	3			12
dk								1			1	2	2	4	3		12
dkg														3	6	3	12
ltg										3	6	3					12
g				3	6	3											12
sf				1	2	2	2	2	3								12
d							1	2	2	2	2	3					12
Total	5	12	14	14	14	14	9	8	12	9	15	16	4	10	9	3	168

1987AW~2000AW 明度出現比率 (表-4)

明度	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	0	Total
9	1%	3%	1%	3%	1%	2%	1%	0%	4%	3%	3%	0%	2%	2%	2%
8.5	3%	3%	3%	3%	3%	2%	2%	1%	2%	4%	2%	3%	2%	1%	3%
8	0%	3%	1%	3%	2%	3%	3%	1%	3%	3%	3%	4%	2%	2%	3%
7.5	1%	6%	3%	4%	4%	4%	4%	7%	4%	3%	4%	3%	3%	5%	4%
7	4%	4%	5%	5%	6%	4%	5%	5%	5%	4%	5%	6%	5%	4%	5%
6.5	3%	7%	4%	4%	4%	3%	6%	4%	5%	4%	2%	6%	5%	8%	5%
6	1%	3%	1%	3%	2%	3%	0%	1%	1%	3%	2%	0%	2%	2%	2%
5.5	5%	4%	3%	6%	5%	4%	3%	3%	3%	6%	3%	2%	2%	3%	4%
5	9%	10%	8%	9%	6%	7%	6%	6%	6%	7%	7%	6%	5%	6%	7%
4.5	10%	6%	5%	10%	9%	7%	9%	4%	7%	7%	8%	7%	7%	6%	7%
4	12%	8%	14%	9%	11%	7%	7%	9%	6%	8%	10%	5%	10%	5%	9%
3.5	7%	11%	12%	10%	13%	13%	12%	14%	13%	10%	14%	12%	13%	14%	12%
3	7%	3%	4%	2%	3%	4%	4%	3%	2%	2%	3%	3%	2%	3%	3%
2.5	9%	4%	7%	7%	7%	8%	7%	11%	8%	8%	7%	8%	8%	7%	7%
2	10%	9%	14%	7%	8%	12%	7%	9%	5%	6%	6%	12%	11%	8%	9%
1.5	2%	2%	5%	2%	5%	5%	4%	5%	3%	4%	4%	8%	5%	8%	5%
Neutral	15%	13%	11%	10%	9%	11%	18%	16%	24%	19%	15%	16%	14%	14%	15%
G&S	0%	0%	0%	1%	2%	2%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	1%	1%
Total	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%



の明度が最も高く 9.5、黒が最も低く 1.5 と数値で表される。一般に明度は「明るい、暗い」、「明度が高い、低い」で表現され、一般に高明度、中明度、低明度の 3 つに分類される。

PCCS 記号で明度をみると、同じ色調(トーン)の色であっても明度数値が異なる。各トーンにおける明度数値を調べ、(表-3)に整理し、明度分類をした。そして 14 年間の明度の出現比率を(表-4)にまとめた。14 年間の平均出現比率を見ても分かるように秋冬シーズンの場合、低明度の割合(45%)が最も高く、中明度(24%)、高明度(16%)の順になる。

14 年間の出現比率を時系列にみると、低明度に対して中明度と高明度の変化傾向は歩調を合わせて推移している。そこで低明度と中明度+高明度を比較するために(図表-5)を作成した。92年、93年が分岐点となり傾向推移に変化が現れている。それ以前の 87~91 年までは 1 年毎に交互に大きく増減を繰り返し、推移が変化しているのに対し、それ以後の 94~2000 年にかけて 95~96 年を除き低明度の割合が高く、3~4 年毎に増減を繰り返す変化が見られ、80 年代後半の傾向と比べると、変化する期間が延長し、流行速度が緩慢になっている。つまり、世界的な好景気と不景気による経済動向に色の明るさ(明度)が影響されていることが解る。

②明度数値 4.5 と 3.5 の比較

明度数値 4.5 は中明度の中では暗い色である。数値 3.5 は低明度の中では明るい色に属している。両者の明度差は少なく、類似した明度である。この出現比率を時系列に比較するために(図表-6)を作成した。やや暗い明度 3.5 の出現割合は多いが、97 年を除き相互に増減を繰り返し、相関していることが解った。つまり、全体の出現比率から見て、注目される色彩傾向にはならないが、秋冬シーズンの特徴づける色調であるビビットとストロング(鮮やかで強い)、ディープとダーク(濃い、暗い)の 2 つのトーンの明度が交互に増減を繰り返しながら変化していることが解る。

4. まとめ

予測のための流行色傾向分析は、14 年間のデータを基に時系列的に相関する色彩傾向の規則性を解析した。色相においては暖色系と寒色系、補色の関係について、色調においては彩度と明度に分けて分析を進めた。予測の

方向性を確認するため方法を次の 6 項目にまとめた。

- 1) 色相における暖色系と寒色系の比較では暖色系と寒色系+無彩色の時系列出現比率を比較すると、相互の増減が相関することが確認できる。
 - 2) 色相における補色関係にあるオレンジ系、イエロー系とブルー系、バイオレット系が 90 年代になって 3~4 年ごとに交互に増減し、変化を繰り返していることが確認できる。
 - 3) 彩度の出現比率において 92 年から低彩度の割合が高まるが、高彩度と低彩度が交互に 3~4 年毎に増減を繰り返し、相関することが確認できる。
 - 4) 彩度の出現比率において中彩度と無彩色は、中彩度の出現比率が高いが、95 年の無彩色の台頭を軸に 94 年~98 年にかけて相互に増減を繰り返し、相関していることが確認できる。
 - 5) 明度の出現比率において低明度と中明度+高明度を比較すると 92 年、93 年が分岐点となり傾向推移に変化が現れ、それ以前の 87~91 年までは 1 年毎に交互に大きく増減を繰り返し、推移が変化しているのに対し、以後の 94~2000 年にかけて 95~96 年を除き低明度の割合が高いが、3~4 年毎に増減を繰り返す相関が見られ、分岐点以前と以後を比べると流行速度が緩慢になっている。つまり、経済動向に色の明るさ(明度)が影響されていることが確認できる。
 - 6) 秋冬シーズンを特徴づける色調であるビビットとストロング(鮮やかで強い)、ディープとダーク(濃い、暗い)の 2 つのトーンの明度が交互に増減を繰り返しながら変化していることが確認できる。
- 色相と色調の出現状況から予測色を策定するだけでなく、方向性確認のためには上記の 6 項目の検証がポイントになる。この手法により次回は 14 年間の春夏シーズンの分析をする予定である。

謝 辞

市丸雄平先生、小林美佳子院生に分析計算、図表作成にご協力いただき感謝しています。

参考文献

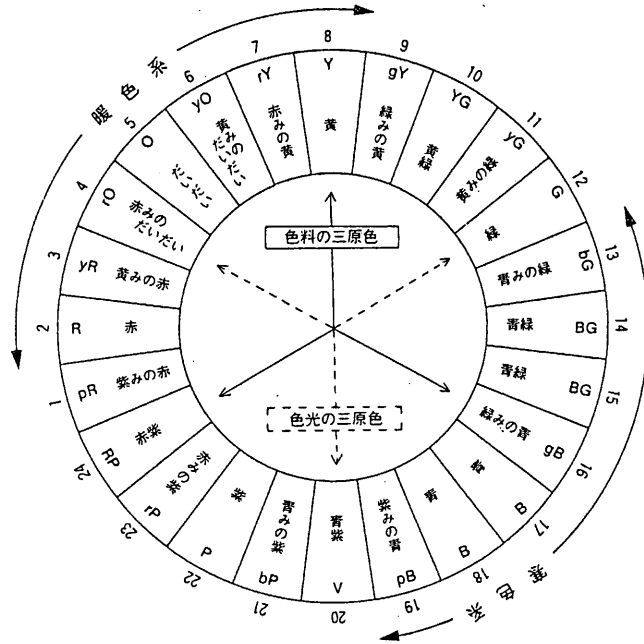
- 1) 北畠耀：デザインと色彩 日本色研事業株式会社
- 2) 東京商工会議所編：ファッション色彩 中央経済社
- 3) 松田豊：色彩のデザイン 朝倉書店

注

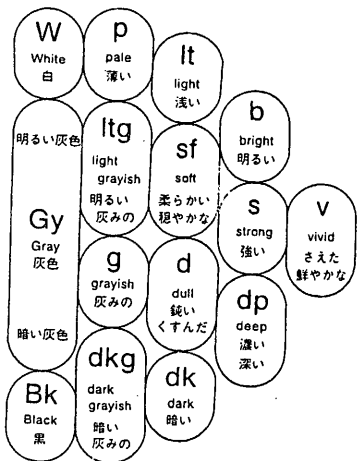
PCCS=Practical Color Co-ordinate System の略称

〈色相環〉

PCCS 色相環



図表-7



トーン区分 (PCCS)

図表-8 等色相面におけるトーンの位置付け

トーンの種類

	英名	トーン記号	和名	
有 彩 色	vivid	v	さえた、鮮やかな	
	bright	b	明るい	
	strong	s	強い	
	deep	dp	深い、濃い	
	light	lt	浅い	
	soft	sf	柔らかい、穏やかな	
	dull	d	鈍い、くすんだ	
	dark	dk	暗い	
	pale	p	薄い	
	light grayish	ltg	明るい灰みの	
	grayish	g	灰みの	
	dark grayish	dkg	暗い灰みの	
	無 彩 色	white	W	白
		light gray	ltGy	明るい灰色
medium gray		mGy	灰色	
dark gray		dkGy	暗い灰色	
black	Bk	黒		

表-5

Summary

In order to study the trend of 'forecast color' I have collected color chips (total 6246) from the magazine (Fashion News) of Paris-Collection between 1987autumn/winter and 2000 autumn/winter. These color chips were classified each year into the color table to construct with hue and tone according to Practical Color Co-ordinate System. The purpose of this report studied the correlation of following characteristic results. 1. between warm colors and cold colors in hue. 2. some part of the complementary colors in hue. 3. between high and low saturation in tone. 4. between middle saturation in tone and neutral. 5. between high & middle lightness and low lightness in tone. 6. between middle lightness 4.5 and dark lightness 3.5 in tone.